

女
郎
花

女郎花は、秋の風情に合う花で日当たりのよい山野に生える。古くからの詩歌に登場する花で茎の上部で枝分かれした先に多数の黄色い小花が咲く。その花を見て「忘れものを見つけた気分」とは言い得て妙。一物俳句のお手本になりました。

忘れもの見つけた気分おみなえし 小田 純子

今月の推薦句

里帰りかなかなに背を押され 時松ヤスコ

「かなかな」は蝸のこと。軽い金属音みたいな澄んだ美しい声で鳴く。背を押されの下五で句が成功。

連雀にあしらわれ居り九十九髪 野木チズ子

「子雀」は春の季語ですが「連雀」はいくぶん大きな小鳥で秋の季語。「九十九髪」（つくもがみ）老女の白髪を指す。中七の「あしらわれ居り」が効果的。

紺碧の空に染み入る独活の花 泉 溪

「紺碧の空」はとてもきれいで澄み渡った青空のこと。独活の花は白色もしくは薄緑色の小さな花で花言葉は「忘れてしまった思い出」とか。紺碧の空を見上げ何を思っているのでしょうか。

俳句の基本

句を熟成させる

読者俳句

ふるさとの俳人たち

その⑧ 続 駒走 松恵

前号その⑦で紹介した句集『末の娘』改めての紹介です。この句集は、一男三女の末っ子である幸谷恵子さんの編集によるもので都合四集にわたる句集です。大反響の初刊『末の娘』は松恵さんが古希。『続末の娘』は八十歳。『続々末の娘』は九十歳。『末の娘終焉』は、何と百歳というそれぞれ節目の時期の句集。まさにまつさん俳句の集大成の句集です。まずは、それぞれの句集から印象深い句を紹介。まつさん俳句スケールの大きい大景の句を口誦してみましよう。

朝霧の上に居並ぶ玖珠の山 (末の娘)
山頭火現れそうな大花野 (続末の娘)
千年の昨日の如く藤揺るる (続々末の娘)
沖縄忌母は生涯海の色 (末の娘終焉)

松恵俳句は、続末の娘までは俳誌「落」や合同新聞への投句が中心で伝統俳句を大切にされています。続々末の娘からは現代俳句で頭角を表し九十歳にして様々な賞を受賞。第一回沖縄忌母句大会は「泣く時間たつぷりとって衣被」第二回「海鳴りは鎮魂の唄沖縄忌」第三回「沖縄忌何を信じてキリンの首」第四回「沖縄忌母の涙が海となる」第五回「靴音の洞窟に飢し沖縄忌」すべて特選などの特別賞の連続上位入選です。これは前例がないようです。誌面の都合で詳しく説明できないのが残念ですが、これらの句集は、九重町の図書館に保管されています。ぜひ、ご一読ください。



佳作 二十席

ふる里へふる里へ馳せ吾亦紅 律子
山法師実の降る朝の墓参かな ヨウ子
新涼や九重の峰の高うなり 豊國
酷暑かな草に隠れてイボカエル ムツ子
悠々と鳶円描く処暑の空 則子
いそいそと今宵廊下の冷んやりさ 勝子
星月夜寝間より仰ぐひと日かな 次江
渡り鳥虚空に道あり我もまた トシ子
新涼の雨柔らかくブラウスに 直人
窓の景今朝華やきて木槿かな 香澄

落蟬や遠くたしかにある不安 八千子
秋夕焼感謝を込める馬洗 重吉
新涼や歩く人なき遊歩道 末子
涼新たワイシャツ白き一年生 桐友
蟬螂のおとこ喰ってる星の夜 一主
風のまま行方定めぬ落葉かな 文雄
炎よりなお赤く燃え鶏頭かな 好美
長雨の愁眉開くや秋の晴れ 恒己
秋扇バックの底でお休みタイム 左世美
久大線赤と黄色のカンナかな 良子

（選者・評）短歌から俳句に転じた人がまず戸惑うのは「思いを述べる」から「ものに語らせる」に変わる点。最短詩の俳句はどきどきでもクールに省略を尽くしてモノに語らせねばならないという点を改めて実感する。だから短歌の経験者は上達も早い。作品の中に思い強く述べる句は少ない。俳句はどきどきでも作る人と読む人の協同作業という理解が広がったようだ。思いは読み手の心に委ねる。こんな芸術は他には見当たらない。▽今月の投稿句もじっくりと読者の側で思いを広げて（こごりゅううしやう）

お詫びと訂正 八月号香澄さんの句「曇の峰」は正しくは「雲の峰」でした。お詫びして訂正いたします。